



## 国民のためのエネルギーを (ドイツ統合に思う)

中部電力株式会社 取締役副社長 山崎 魏

「止ったかと思った歴史の流れが、突然ドイツにやって来た。これから“やるぞ”と言う希望と勇気が湧いてくる。まるで、旧い大陸が翼を得たようだ。」

プロイセン電力のクレーマ会長は、青年のように頬を紅潮させてこう語った。去る四月下旬、ミュンヘンで開催された日独電力会議の席上でのことである。

あれほど頑固であると思った東西の壁が予告もなしに或る日突然崩れ、堰を切ったようにドイツの統一が現実のものになろうとしたのであるから、歓喜と戸惑いが同時にやって来て、老いも若きも湧き立ったことは無理からぬことである。

会議の席上でも、コーヒブレイクでも、夕食会でも、話題は殆ど「東」のことであった。生木を裂かれたような分断がどんなに強い痛みを国民に与えていたかを知らなかった私共にとっては、驚くほどの過剰な反応であるが、西ドイツが持てるすべてを投げうって東ドイツと一体化しようとする意気込みの激しさを目のあたりにして、ドイツ国民には「戦後」は終わっていなかったのだと、改めて認識させられる思いであった。

勿論、総論大賛成の陰で各論のむつかしさは想像以上であって、エネルギーのこと、通貨のこと、為替のこと、土地のこと、住宅のこと、どれ一つをとっても満足な解決策はない。あるものは、ただ、強い郷愁と統一の意志だけである。

電力についても系統の質の格差は著しくて、当面、とても粗悪な東ドイツの系統と連系することなど出来ないし、発電設備も老朽化している。原子力発電所も西ドイツの安全基準でチェックしたところ合格点はとてももらえなくて、どうして応急対策をするかが懸案となっていた。

ECを始め西側の諸国も手を差しのべてはいるが、それは隣組としてのつき合いで、すさまじいばかりのドイツの意気込みと較ぶべくもなく、私はドイツ民族の自助努力のすさまじさに改めて感銘したのである。ドイツのエネルギーを、ドイツの電力を、と話題のすべてが国ベースの考え方に集中している点は素晴らしい限りで、とかく他人任せの我が国民性と比較し、考えさせられる点が多かった。

去る6月、通産省の総合エネルギー調査会は、一年間の検討結果を踏まえて新たなエネルギーの長期需給計画の中間報告を発表した。これは、2010年までの20年間のエネルギー計画を見直したものであるが、エネルギーセキュリティの問題に加えて新たに地球温暖化の問題が浮上し、まさに前門の虎、後門の狼と言った状況になった事態を打開して、いかにして国民の繁栄を維持し続けるかと言った

点を検討したものである。

内容について、これからの20年間に原子力発電を4000万kWも建設することなどできるはずがないとか、油の使用量を更に増加させてこれでは油から遠ざかる基本方針が守られていないとか、やや無責任とも思われる批判が出されているが、私は、この報告は検討結果と言うよりむしろ課題の提起であると思う。八方塞がりに近い我が国のエネルギー情勢のなかで、必要最小限のGNPを確保してゆく方策をどうするのか、もしこれが不可能ならばどのような事態になるのかを共に考えようとの問題提起であると思うのである。

過去2回の厳しいオイルショックを経て達成したエネルギー消費のGNP原単位の改善率(36%)と同じ数値を、今後の20年で再び達成することを供給計画の前提としていること一つを考えても、今回の計画が如何に厳しいものであるかがい知れる。そのうえに、研究途上にある新エネルギーを多量に見込んでいることを考えると、やはり今後余程の覚悟で対応してゆかなければ折角の21世紀の繁栄も幻となってしまうと懸念されるのである。

エネルギーにまつわる過去の幾多の事象を思い起こすまでもなく、エネルギー確保は国の大本であり、与野党あげてこれに取り組むべきことは世界の常識である。我が国同様に自前のエネルギーを持たないフランス国民が、電力の70%を頭脳が生んだエネルギー(原子力)に依存して、世界の化石燃料源の動揺に対してもびくともしない姿は教訓以上のものである。また、統合に燃えるドイツが、難局を乗り越えてチャレンジしている姿にも教えられるものが多い。

ドイツの人々の燃える思いを目のあたりにして、私は改めて「日本のエネルギー」について考えさせられたのである。